

第 16 回中華民國英語文教學國際檢討會暨書展參加報告書
The 16th International Symposium and Book Fair on English Teaching
English Teachers' Association Republic of China (ETA-ROC)

酒井志延（千葉商科大学）

1. 謝辞：この大会に JACET 代表として選ばれ、参加できたことは名誉あることだった。
2. 大会日程：2007 年 11 月 9 日から 11 日（飛行機の都合で 8 日に出発し、12 日に帰ってきた）
3. 大会会場：中華民國台北市中山北路 4 段 16 号 台北救国團劍潭海外青年活動中心
(Chien Tan Overseas Youth Activity Center)
4. 全体としての感想：
 - ① 大会予稿集には感嘆した。招待者の論文が 15 本と一般参加者からの 42 本の論文が掲載されていた。一般からの論文は 10 頁程度であり、そのうちの 2 本だけが中国語の論文であり、あとは英語の論文であった。すでに、優秀論文の選考が終わっており、その結果も発表されていた。また、予稿集にある論文を収録した CD-ROM も配布された。
 - ② 発表の質は高かった。論文を書き上げて参加している人が多いせいか、発表の大半が英語で行われていたし、内容もしっかりしたものが多かった。
 - ③ 発表の数も多かった。小学校英語からマルチメディアまで多彩で、そのためにプログラムがバラエティーに富んでいた。参加者は、主催者の発表で 1700 名とのこと。ただ、発表数も多いせいか、参加者が少ない会場も見受けられた。
 - ④ 招待者も多彩だった。16 人中 1 人だけが、台湾からで、Stephen Krashen, Bernard Spolsky, William Grabe, Kensaku Yoshida を初めとしてあとはすべて外国からだった。Sister organizations からは、わたしを初め 4 人が外国から招かれていた。そのため、会場でも英語でのやり取りが飛び交い国際大会の雰囲気があった。台湾で教えている外国人教師も多く参加していた。
 - ⑤ スポンサーの展示場は大賑わいだった。小学校英語の教材会社が多かったせいもあるが、音やパフォーマンスでの呼び込みが人を引きつけていた。大会運営費を参加者に負担させないために、スポンサーが多くして、なおかつ企業に感謝をするために大会の名前に Book fair を入れていた。また、ディナーパーティーにスポンサーを招いて、感謝状を贈っていた。スポンサーがあって成り立っている大会であることがよく理解できた。

5. Sister Organizations からの参加についての報告

① JACET からの派遣である酒井志延以外に、Brian Heldenbrand (韓国 : KOTESOL), Aurelio Vilbar (フィリピン : PALT), Ghim Lian PhyllisChew(シンガポール : ELLTAS) から招待されていた。3人とはよく話し、友誼を深めた。今後、JACET の国際関係の維持や発展に役立つ人的ネットワークができたと思う。

② Brian Heldenbrad(韓国 : KOTESOL)は、もともとアメリカ出身で、Jeonju University の准教授である。KOTESOL の会長からの指名で参加したそう。ETA-ROC への参加は 2 回目で、知り合いも多く、英語母語話者ということもあり、すっかりとけ込んでいた。発表は、"Two Practical Activities to Enhance Speaking" というタイトルで、内容は、インターネット上の情報を読ませて情報をとらせて、それをペアの練習相手にまたはクラスで発表させるという 4 技能統合型の大学生を対象とした授業についての紹介であった。プレゼンテーションはアメリカ人らしく、ユーモアも交えそつのないものであった。授業に効果的なウェブサイトの紹介もあったが、韓国的なものは全く感じられなかった。個人的には友人となったが、せっかくある意味で国を代表している派遣だから、韓国人母語話者を派遣するとか、韓国の教育事情を語れる人を派遣するとかすべきではないかと KOTESOL の派遣について若干の疑問を感じた。

③ Aurelio Vilbar (フィリピン : PALT)は、University of the Philippines の 7 つのキャンパスの一つのセブ島にあるフィリピン大学の assistant professor であった。現在は 博士号を取得するために、マニラのキャンパスでの博士課程の学生である。発表のタイトルは、"Promoting Local History and Webpage Designing in the ESL/EFL Classes" で、assistant professor であった時に高校生も指導したその時に、高校生にセブ島の歴史や伝統について、島の古くからの住民についてセブ島の方言でインタビューをし、それを英語に翻訳させて、website にアップロードさせるプロジェクトを英語の授業として実施し、その過程において生徒の英語の 4 技能が向上するという報告であった。発表はバイタリティーがあり、聴衆との活発なインタラクションも交えたもので、フィリピンの教育事情や経済状況にも触れられており、興味深いものであった。発表ではないが個人的に話した時に、ETA-ROC への派遣には競争があり、自分が派遣に選ばれたが、飛行機代は自弁であると語った。その言葉に経済状態の厳しさを窺い知ることができた。

④ Ghim Lian Phyllis Chew(シンガポール: ELLTAS)は、National Institute of Education の准教授である。発表のタイトルは、"Global and Local Languages --- Pragmatic Sustainability in Singapore."で、シンガポールの言語政策の変換についての歴史的な経緯についての発表だった。彼女の報告によると、シンガポールの言語政策は、multi-lingual

→bilingual→monolingual と変化していったそうである。60年代から70年代にかけては、複数ある言語をそのまま使う現状維持の政策であった。70年代から、一党独裁である People's Action Party は、二言語政策に変えた。二言語と英語と北京官話(Speak Mandarin campaign)を話せということで、1978年に彼女の母親の母語である中国の方言でのラジオ放送は一気に禁止されたそうである。しかし、1998年のアジア経済危機以降は、その二言語政策も変更され、英語を第一言語とする一語言語政策になったと述べた。そして、スタンダードな英語を普及させるために、日本の文科省に当たる官庁が”Speak Genuine English. Singlish is an enemy.”と言ったそうである。彼女自身もその変化を肯定的に受け止めている。興味深い発表だった。個人的な会話では、一語言語政策を徹底できたのは、シンガポールが一党独裁であるからで、日本や韓国のような国ではできないだろうと述べていた。また、彼女はシンガポールの方が英語教育が進んでいるので、ELLTASのメンバーはETA-ROCには特に関心が無く、ここ数年間はこの大会に派遣がなかったが、自分は、中国からの移民の第七世代なので、台湾や中華文化に興味があり、今回来ることにしたと述べた。

⑤ JACET 代表の酒井志延は、自律的な学習者についての分析を台湾と日本のテストデータや文献などを踏まえながら、また市川伸一のモデルを応用して動機づけをする e-learning の方法などを紹介した。代表としての礼儀だと思い、事前に論文としてまとめておいた。そのために、情報が多くなりすぎ、説明が細かくなり、”Well prepared.”とか”Too academic to understand.”というコメントも頂いた。少なくとも恥ずかしくない内容だったと思う。代表としては、JACET から飛行機代をだしていただいた。ETA-ROC からは、四泊分の宿舎と三日分の朝食（ビュッフェスタイル）と昼食（お弁当）を与えられ、二日にわたってディナーパーティーに招待された。

6. Invited speakers は、多彩であった。

Liyang Cheng, Queen's University, Canada, Andrew Cohen, University of Minnesota, USA, Miles Craven, Moller Centre in Cambridge, United Kingdom, Semous Fagan, University of Newcastle, Australia, William Grabe, Northern Arizona University, USA, Koon-Ki Tommy Ho, Hong Kong University, Hong Kong, Michael Hoey, University of Liverpool, United Kingdom, Ken Hyland, University of London, United Kingdom, Hengsyung Jeng, National Taiwan University, Stephen Krashen, University of Southern California, USA, Jun Liu, University of Arizona, USA, Bernard Spolsky, Bar-Ilan University, Israel, Fredericka L. Stoller, Northern Arizona University, USA, David D. Williams, Brigham Young University, USA, Huizhong Yang, Shanghai, Jiao Tong University, PROC, Kensaku Yoshida, Sophia University, Japan

多くの参加者を呼ぶためには仕方がないのかもしれないが、アメリカから 6 名、英国から 3 名と英米偏重である感じは否めなかった。

この中で、3名のスピーチとワークショップに参加した。印象に残ったのは、Spolsky のスピーチであったので、それを紹介する。

Spolsky のスピーチを紹介する。Spolsky のタイトルは”Band-aids (いろいろな新しい考えや応急処置) or bulldozers (一気に物事を進めてしまう)? A Language Management Approach to Problem of English Teaching, Learning and Assessment in Taiwan”で、いろいろな成功した言語政策や失敗した事例を紹介しながら、教育的な理由からよりも他の理由、たとえば経済や軍事的な理由などから言語政策は決定されることがあると述べ、言語教育は、「以前の知識」、「能力」、「態度」、そして「その言語に触れること」によって決まると述べた。

7. 一般参加者の発表

4つの発表に参加した。いずれも英語で討論がなされ、また熱心に聞き入っていた。その中で、興味深い発表があったので、紹介する。Shu-ching Chu と Chung-hui Huang のタイトルは”Meeting College students' Learning Expectations”で、教員は、学生の学習したいものの欲求に答えているのかという調査で、答えていない現状を明らかにし、教員は、もっと学習者の学習スタイルの多様性に気づくべきだという主張で終わっていた。その後質疑応答で、学生の英語レベルがとても低いという話題が出た。台湾でもリメディアル教育の必要性があるのではないか思った。

8. その他

一番感じたのは、台北の街の中で英語がほとんど通じないことだった。宿泊施設は、「海外青年活動中心」という名称で、そこのフロントの受付は若い女性なのに、bus schedule のような基本語彙が理解できない状態だった。一般参加者の発表を聞いたり、フロントや街の人英語力から、英語教育はあまりうまくいっていないのかもしれないと感じた。

このような大会に参加して、大きな収穫と思えるのが外国の学者の知己を得ることであろう。さきほど、Ghim Lian Phyllis Chew の発表については紹介したが、それ以上に現在彼女が書いている「リングフランカの歴史」について伺った。壮大で緻密な本で大いに啓蒙された。また、先ほど紹介した Spolsky と個人的に話をした。特に、彼が考案したイスラエルの英語教育のためのベンチマークやスタンダードについて話を伺った。個人的に話が進み親しくなったので、個人的に興味があったユダヤ人の Kippah についても質問した。彼は Kippah をかぶるのは、民族的なアイデンティティーを重視しているからであるからと答えた。異文化理解の授業で使いたいの Kippah をかぶった姿を写真に撮影させてくれないか

とお願いしたら、快諾した頂いたので、斜め上から写真を撮った。

また、Krashen がモデレータのシンポジウムに参加し、そこにシンポジストとして参加していた韓国の Cho, Kyung Sook と reading について、わたしと彼女がほとんど同意見を持っていることが判明した。話が大いに盛り上がり、お互いに教え合って大いに勉強になった。今後国際協力も含めて連絡を取り合うことになった。

この大会に参加できて、個人的にも学ぶことができたし、JACET の国際関係の向上にも貢献できたと思う。最後にもう一度わたしの派遣に関与していただいた人々に感謝の意を表明したい。

酒井志延 拝